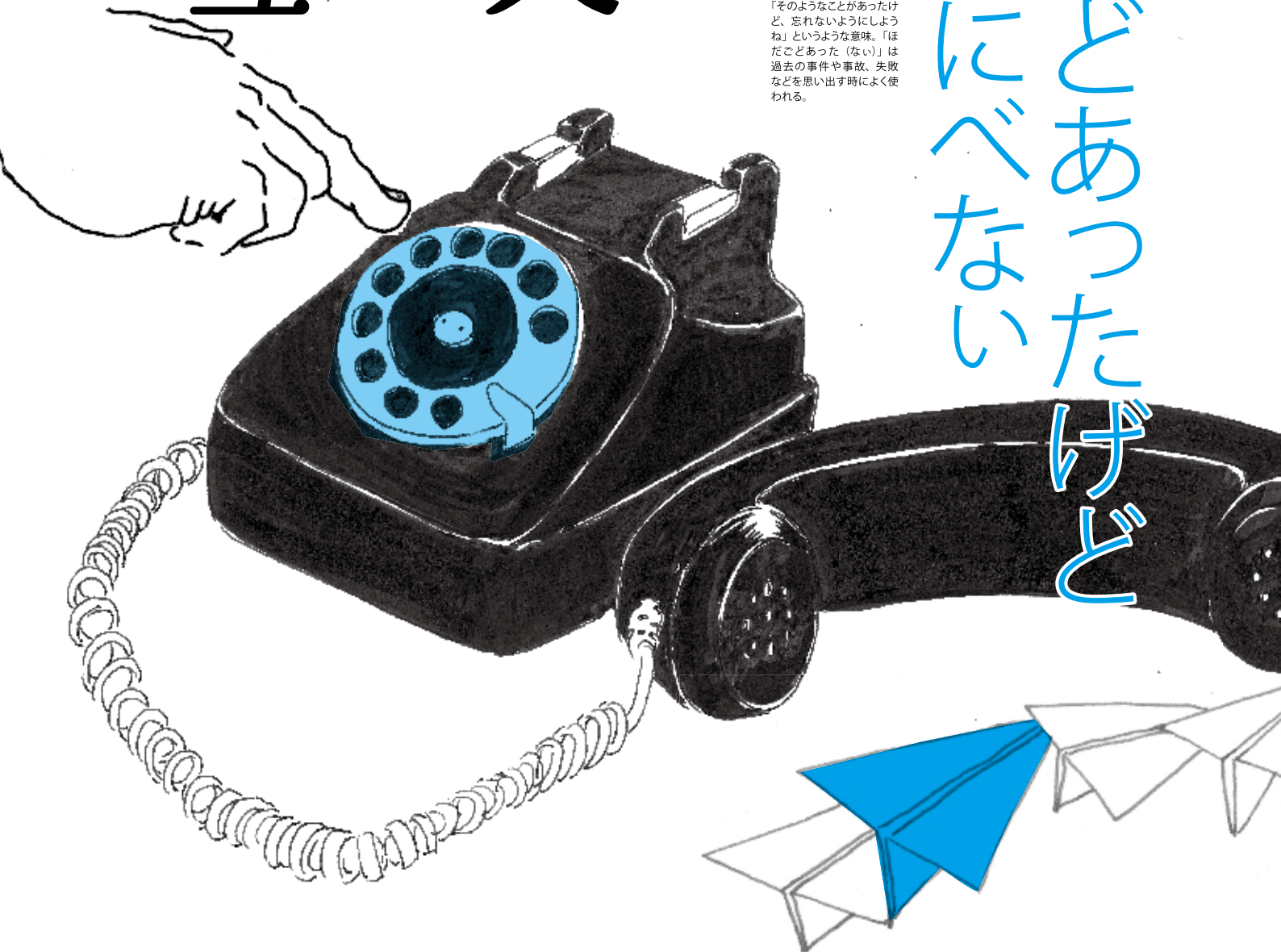


未来館

福島県男女共生センター広報誌

MIRAIKAN NEWS

ニュース



「福島」を風化させるな

ふくしまの言葉

「そのようなことがあったけど、忘れないようにしようね」というような意味。「ほだごどあった(ない)」は過去の事件や事故、失敗などを思い出す時によく使われる。

ほだごどあったげど
わすんにべない

CONTENTS

- 事業レポート
- I「未来館フォーラム・福島大学との連携講座」(p.1-3)
- II「教師のためのヒューマンライツセミナー」(p.4)
- III「ボランティア現地視察研修」(p.5)
- ふくしま女性支援センターほか

44
vol.

未来館フェスティバル 開催します!

平成24年
11月23日^祝・24日^土

現在、フェスティバル実行委員が楽しい企画を準備中です。ぜひ、皆さんでおいでください。

実行委員会からのオススメ
【イベントチーム】

待ちに待った2年ぶりのフェスティバル!
皆さんが、一緒になって学び、教えあうコーナーが盛りだくさん。お互いが交流を図る場もあり、来てみてよかったと思うこと受けあいです。内容は来てからのお楽しみ!

【県民参加企画チーム】

見て楽しい、参加して楽しい、考えて楽しい、美味しく楽しい(!?) 企画がたくさんあります! 今年も、避難女性の手作り製品の発表・販売もありますので、どれを見ようか目移りすること間違いナシです!

昨年度に引き続き、福島大学と連携してさまざまな分野で活躍する講師を招き、県民が多様な視点からジェンダーを考えるきっかけとなる講座を10回にわたり開催しました。一般参加の方約30名を含め各回200名以上の参加があり、多くの学生や参加者から好評をいただきました。その中から、2つの講座について、講師の発言要旨と学生の感想を報告します。

日程	講師	テーマ
5月18日	菅野 クニさん <small>(飯館村村民、村主催 第1回「若妻の翼」参加)</small>	「若妻の翼」と飯館村の村づくり
5月25日	長沢 涼子 <small>(財)福島県男女共生センター 職員)</small>	避難所内「女性専用スペース」の取り組み
6月 1日	加藤 志生子さん <small>(財)せんだい男女共同参画財団)</small>	ジェンダーを考える
6月 8日	渡邊 とみ子さん <small>(かーちゃんの力・プロジェクト協議会代表)</small>	「かーちゃんの力」にできること ～放射線災害のただなかで
6月15日	菅波 香織さん <small>(福島の子どもたちを守る法律家ネットワーク)</small>	放射能問題とジェンダー
6月22日	丹羽 麻子さん <small>(女性の自立を応援する会)</small>	東日本大震災・福島原発事故とジェンダー ～女性相談の現場から
6月29日	宗形 初枝さん <small>(リプロダクティブ・ヘルスの会代表)</small>	助産師と一緒に性のちについて語りませんか
7月 6日	南條 かおるさん <small>(福島県立梁川高等学校教諭)</small>	制服とジェンダー～女子高生モードの語るもの (震災とジェンダー～お母さんモードと語るもの)
7月13日	池田 恵子さん <small>(静岡大学教育学部教授)</small>	災害リスク削減のジェンダー主流化
7月20日	山口 哲子さん <small>(一社)国際女性教育振興会 福島県支部長)</small>	自分を変革し、地域社会を豊かに変革する活動のすすめ

会場:福島大学 L4教室



6月22日

丹羽 麻子さん
(女性の自立を応援する会)

東日本大震災・福島原発事故とジェンダー ～女性相談の現場から

はじめに

◎私はフェミニストカウンセラーで、ジェンダーの視点で女性のための相談活動をしている。現在は内閣府「女性のための電話相談ふくしま」(TEL:0120-207-440)の拠点運営にかかわっている。震災後は性別役割分担意識が強化されるので、男らしさ・女らしさに縛られながら生きるしんどさを相談できる窓口の存在がより重要性を増す。特に女性は社会的な立場が弱く、専門の相談窓口の必要性は高い。たとえば平均賃金をみても女性は男性の約7割。日本社会にはいまだに明らかな性別格差があることに留意されたい。

見えにくい被災を見ていこう ～当事者の視点を働かせること

◎津波や強制避難など目に見える被災が明らかな地域の人に比べると、その他の地域の人には被災に関する当事者認識の持ち方はさまざまにならざるを得ない。県外の人からはさらに福島の人が抱えている問題が見えにくい。
◎ここに現在の郡山市街地の写真がある。誰もマスクも防護

服も着用していないし、普通の風景に見える…が、どこかが変なのにお気づきだろうか。例えば、雨が続いた次の晴れの日には布団や洗濯物がベランダに干されていないマンションの風景。いい天気なのに子どもやお年寄りの姿が全くない公園の様子。

◎本当は置いてあること自体が異様であるはずの放射能測定器。表示されている数値を見て「昨日とさほど変わらないな」と思うことが日常化しているのでは。自分がどうして今までと違う生活をしているのか、どうして自分がしんどいのか、自分の感覚にフタをせずにとらえておくことが大事。放射能被害は物理的に目に“見えない”だけでなく、“見せない”“見たくない”という面もあるので、意識していないと被災の現実が個人の日常生活の中に紛れ込み、本来は社会の問題であるはずのことが個人の「自己責任」問題にすり替わっていってしまう。

女性のための相談事業からみえてくること

◎東日本大震災女性センターネットワークが寄付金を集めるなど、全国の女性センターの協力があって、昨年9月～今年の2月まで郡山で女性相談事業を実施することができた。週

1回5時間の電話開設にもかかわらず、相談件数は1日平均4、5件。一見被災がなく「普通に見える」地域からの利用が多く、「相談場所を探していた」と言っていた。夫婦や家族問題の相談が全体の1/3。DV・デートDVの相談もあり、日本中を「家族の絆が大事」とのスローガンが席卷する中、その“絆”によって苦しめられている女性たちがたくさんいた。

- ◎その典型的な相談事例をフィクションに再構成して紹介する。「30代女性。もやもやとしていて何かつらい。震災で県外の実家に一時避難したが両親に負担がかかるからと帰ってきた、屋外活動もできない、食べ物の選択にも迷う、長男はずっと私にまわりついて気が休まる暇がない。自主避難が増えて長男の遊び相手も自分の友人もいなくなっている。うつ病になって投薬治療をしたが病人扱いされるのがつらく、病院に行くのが嫌になった。夫は子育てに協力的ではなく、なじみのない場所で毎日ふさぎ込んでいる。」相談者は転勤族の妻。慣れない土地での密室育児を余儀なくされ、放射能の影響を懸念しながら毎日の衣食住に神経をすり減らす生活が続く。稼ぎ手は夫、自分は家事育児役割を一身に背負うという固定的性別役割分担の中で、被災の負担を抱えながらいつの間にか孤立に追い込まれていく女性の立場の弱さが見えてくる。「20代県外在住。福島県に彼氏がいる。結婚を考えており、彼は福島に来てくれと言う。子どもも欲しいが放射能のことが心配。彼に相談しても真剣に取り合わず大丈夫だよとしか言わない。福島の母子はどうして逃げない!？」生子み・子育てのことは女性の問題とされがちな社会で、やり場のない不安や怒りに苛まれている女性たちの様子が浮かび上がってくる。
- ◎主に幼児を持つ女性を対象にした託児付きの企画「ママ友さろん」では、簡単なアクセサリーづくりなどをしながら、子育ての悩みや普通の生活での不安などを語り合う。語り合いの中では、被ばくによる健康不安だけでなく、夫との心理的葛藤や親世代との意識差などについて話がはずむ。お互いの価値観の違いを尊重することを前提に安心して語れる場の設定があるからこそで、「女性が家族の情緒調整や健康管理に責任を負うのは当たり前だ」という固定的な性別役割観のもとではとても悩みを吐き出すことなどできない。また「いのちを守る母/女性」という価値観を強く内面化して

いるほど「自己責任」の重さにつぶされそうになってしまう。個人の日常生活に巧妙に入りこんだ被災が、固定的なジェンダー意識によって家庭責任を負う女性たちの側にさらに見えにくい形で負担をかけているのがわかる。

震災後の社会を生き抜くために

- ◎相談内容を分析していくと見えてくるのは、決して福島の問題は特別ではないということ。ジェンダー格差、中央/地方の対立、経済効率主義など、もともと社会が内包していた問題が震災によって浮き彫りになり、その中で社会的に弱い立場にある側にしわ寄せがきている。
- ◎どうしたらその人らしく生きることができるのかをともに考えていくことが求められている。被災者には様々な背景があり、様々な決断をしている。「あなたが苦しみは何ですか?」と同じ地平に立ち、見えにくいものを見ていこうとする視点が大切。一人ひとりの気持ちに寄り添って考え、その多様性を尊重していきたい。

【学生の感想】

- ◎天気予報では風向きも知らされる。除染作業をする人を外で見つける。公園に放射能測定器が設置される。これらのことが「日常」になり不思議に思わなくなったが、慣れてしまうことが恐ろしいのだと気づかされた。違和感の正体は何なのかを考えることが大事だと思った。
- ◎電話相談では、女性は福島に残ることの不安があるようですが、私も自分が福島出身・福島大学卒であることで差別を受けるかどうか心配だ。
- ◎女性が立ち直っていくためにも相談体制を整備するのは必要だと思う。また、DV被害を減らすためにも男性の相談や男性向けのストレスを解消する対策も必要だと感じた。



7月13日

池田 恵子さん
(静岡大学教育学部教授)

災害リスク削減のジェンダー主流化

「災害とジェンダー」研究:成り立ちと展開

- ◎ジェンダー主流化とは、様々な制度の中にジェンダー平等を進めるための仕組みを組み込んでいくこと。様々な分野の政策や計画で、予算・人材の確保につなげることが大事。
- ◎今から40年くらい前、海外でフィールドワークをしていた文化人類学者や地理学者が大災害に遭遇し、途上国では一つの台風や地震で何十万人も亡くなるのを目の当たりにして、社会の構造的な問題と災害は関連があるのではないかと考えるようになった。
- ◎2004年のインド洋大津波では、インド南部のある村での死

者数336名のうち女性は78%、インドネシアのとある村での死傷者数3,766名のうち女性は56%だった。また、1991年のバングラデシュの高潮では、各年代で女性の死亡率が男性を明らかに上回っていた。死亡者数の男女差は生物学的、統計的に見て説明できない。阪神淡路大震災でも女性が約1,000人多く亡くなっている。

◎地理学者Neumayerの研究(1981～2002年までの4,605件の災害分析)により、①災害により女性が男性よりも多く死亡、②大災害ほど、犠牲者数の男女差が大きい、③女性の社会的経済的地位が高い国ほど災害の犠牲者数の男女差は小さい、ということが分かった。

- ◎同じ世帯・地域に住んでいて、なぜ女性が多く亡くなるのか。B.Wisnerは「災害脆弱性」の言葉で説明している。「災害脆弱性」とは、災害の影響を受けやすいという意味。
- ◎ハザード(hazard:地震・洪水・高潮・津波などの自然現象)がディザスター(disaster:災害)になるのは、脆弱性の高い個人とハザードが重なりあったときである。
- ◎バリアフリーが実現していれば、障がい者の苦悩は少なくなるように、災害脆弱性が少なくなれば、ハザードが襲ってきても被害を少なく抑えることができる。災害は社会が生み出していると言え、ジェンダー規範や性別役割分担は、災害の被害を大きくする根本原因となっている。災害時の女性の困難は、災害が起こったときに突然発生するのではなく、日頃から存在する不平等に原因がある。

国際的な取組み

- ◎2005年の国連防災世界会議(神戸市)では、「兵庫行動枠組」として、①あらゆる災害リスク管理政策・計画の意思決定過程にジェンダーの視点を取り入れる、②災害リスク軽減の立案では、文化的多様性、年齢、及び脆弱な集団を適切に考慮する、③女性、脆弱な人々に訓練や教育機会への平等なアクセスを確保する、④ジェンダーや文化への配慮を災害リスク軽減に関する教育訓練の不可欠な要素とする、ことが提案された。では、どれだけ進んでいるだろうか？
- ◎災害救援や復興の支援の際に「ジェンダー多様性への配慮」が必要なのはなぜか。それは、災害時の支援は、最も支援を必要とする人々や最も弱い立場にいる人々に届かないから。男性と女性、少年と少女では、必要とするもの、困難と感ずること、困難に立ち向かう能力、困難なときに発揮できる能力に違いがある。誰に対しても「平均的な支援で皆平等」とするのは、有効な支援にならない。効果が高いのは、遠回りのようでも個々のニーズに対応し、成果において平等を目指すこと。

事例：バングラデシュの災害リスク削減におけるジェンダー視点の導入

- ◎バングラデシュは世界の最貧国の一つで、縫製産業が盛んな国である。ユニクロの工場など、日本の会社もここにある。
- ◎度重なる災害で、川を堤防で囲う政策をとったが成果が上がらなかったため、1990年代からは洪水があることを前提として農村開発を進めるようになる。2000年からは災害リ



- スクマネジメントやアセスメントへ発想転換し、政策が災害をどれだけ低減するのが一つの指標となった。
- ◎具体的には、1990年代初め、洪水制御対策は国家予算の約13%で、教育・農村対策(貧困対策)の約4~5%に比べて3倍もの経費をかけていた。これが2010年には、洪水制御対策が約3~4%、教育・農村対策(貧困対策)が約15%と逆転した。人(とりわけ女性)にお金を使う、つまり、災害脆弱性の進行を食い止めることにお金を使うことに転換した。
- ◎1991年には、平均寿命が女性の方が短いという世界でも珍しい国だったが、2009年には逆転した。女性が教育を受けやすいように女性の教員を増やすなどの対策が講じられ、今では女性が教育を受けやすい環境にある。
- ◎バングラデシュでは、人口の約9割以上はイスラム教徒で基本的には男性社会なのだが、今では女性が社会に進出できるよう工夫している。地域防災では、集落の防災委員に、産婆や女性組織のリーダーなど必ず女性を入れるようにしている。さらに、村レベルで脆弱性が何かを特定できるよう分析し、地域のハザードマップを作成するなどの取組みもある。災害時、男性が女性の手を引いて逃げるのが難しいので、女性同士で支援できるよう、住民防災組織にも多くの女性が参加している。また、女性の結婚持参金制度(イスラム教の慣習)により、娘がいる家族が困窮・貧困化することから災害脆弱性が高まるため、その制度を無くそうと主張する男性もいた。
- ◎このようにバングラデシュでは、女性と男性の格差を減らすという明確な意図を持って取り組んでいる。1991年の高潮では約13万8,000人が亡くなったが、2007年に起きた同規模のサイクロンでは、被害の死者は約4,000人となった。

“Building back better”
災害リスクを減らす復興へ

- ◎災害脆弱性は固定的・本質的なものではなくて社会で作られていくものであり、社会のあり方を変えることで改善できる。災害脆弱性を再生産するような復興は不適切である。
- ◎学生の皆さんはこれからいろいろな専門領域に進まれると思うが、組織や地域で脆弱性を生み出している制度や政策が何であるのか、どのようにすれば脆弱性の高い人々の課題を克服できるのか、そのことに向き合って考え続けて欲しいと思う。

【学生の感想】

- ◎男女の社会的・経済的格差と災害被害との関連は考えたことがなかった。女性の方が男性よりも何倍も死亡率が高いことには驚いた。バングラデシュの場合、男女の役割の違いで家にこもっている女性が何人も被害に遭ったが、今回の震災で日本にも当てはまるどころもあったと思う。
- ◎同じ対応をすることが平等であることとして本当にそれでいいのか。そうではなく、女性、男性、年代など様々な異なるニーズに合わせて支援していくことが、災害被害を少なくすることなのだ気づいた。
- ◎普段の男女平等の取組みがいかに大事であるか、格差を改善していく取組みを、自分の問題としてとらえることから始めていきたい。

【開催日時】平成24年8月17日(金)10時~16時

■今年度の研修プログラム

講義1	「男女共同参画とは」 【講師】福島県生活環境部 青少年・男女共生課長 松崎 健一 さん
講義2	「学校における男女共同参画」 【講師】福島県教育庁 高校教育課 指導主事 黒川 佳子 さん
講話	「福島県の男女共同参画推進拠点施設としての役割」 【講師】福島県男女共生センター 職員 岡部 貴敏
解説	「指導教材、指導ポイント集、副読本の活用について」 【講師】福島県生活環境部 青少年・男女共生課 主査 大塚 由美子 さん
研究協議	「授業実践に向けて」 【事例発表者および指導助言者】 特別活動部会 西郷村立小田倉小学校 教諭 深谷 裕之 さん 福島県教育庁健康教育課 指導主事 石幡 良子 さん 教科部会 福島県立郡山商業高等学校 教諭 中野 道代 さん 福島県教育庁高校教育課 指導主事 黒川 佳子 さん

教職員等を対象に「男女共同参画」を総合的に学ぶ機会を提供し、意識の啓発を図るとともに、学校における男女共同参画推進に向けた指導実践に資する研修を、福島県教育庁との共催で開催しました。

講義内容および感想

- 講義1では、現在の日本が抱える課題について具体的なデータから解説され、課題解決に向けた男女共同参画社会の必要性をお話いただきました。
- 講義2では、学校において「学校そのものが男女共同参画社会であること」、「学校教育として、男女共同参画社会について学ぶこと」の大切さや意義等についてお話いただきました。



【感想】

- ◎男女共同参画について違和感があったが、性別を前提とするのではなく、「人として」「豊かな生活を目指した」「個性に応じた」という部分から理解ができました。
- ◎単に男女平等や雇用のことではなく、「人が人として生きること」に重きをおいて指導することが大切だと思いました。

研究協議内容および感想

協議に先立ち、お二人の先生から、「家事の分担から男女共同参画に気づき、将来どうあるべきかを考える学級活動の授業」、「子育て中の夫婦の生活時間から夫婦(男女)の子育てのあり方について考える家庭科の授業」の実践事例を発表いた

いただきました。教科部会、特別活動部会では、持ち寄った授業案の検討、授業者それぞれの考えや立案時の悩みなど活発な意見交換が行われました。



【感想】

- ◎指導ポイント集や指導教材はすぐに活用できるので大変ありがたい。高校生にも十分な内容なので参考にさせていただきます。
- ◎他の先生方の工夫した点や悩みを聞き、とても参考になった。また疑問点もご指導いただき授業に役立てていきたい。
- ◎公開授業の趣旨や男女共同参画についての理解が深まったので、授業に向けての構成や構想の手がかりとすることができました。

セミナー受講後の感想

- ◎指導する立場としても、個人としてもとてもたくさんの気づきがありました。
- ◎男性の参加者が多いとなお素晴らしいものになるでしょう。今日のセミナーから習うべき、学ぶべきことが多くありました。
- ◎ぜひ、多くの先生方に学んでいただける機会があれば良いと思います。
- ◎先生方の現状や考え(意外と古風なところ)を聞くことができ、もっと男女共同参画についての認識を持ってもらえると良いのではないかと思います。

平成24年7月27日(金)に宮城県山元町にて、やまもと民話の会の庄司アイ会長から津波の被害体験や証言集「巨大津波」を作成する経緯等をお聞きすることなどを目的として、ボランティア現地視察研修を行いました。当センターのボランティアは、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の発生後、「被災者のためりサイクルコーナー」や「ほっとカフェ」など、自主的なボランティア活動を行うとともに、昨年度開催した「未来館セミナー」を通し、被災者支援についての理解も深めてきました。

今回の現地視察研修では、山元町中央公民館で庄司会長を始め7名の会員の方から、大震災の3月11日当時、家ごと津波に流された体験や避難所での混乱の様子、全国からの支援に助けられたこと、常日頃から防災に対する備えの大切さなどのお話をお聞きしました。また、山元町へ向かう



途中、「あぶくま茶屋」へ立ち寄り、「かーちゃんのカ・プロジェクト協議会」の取り組みについてお聞きし、人気のない飯館村や南相馬市などの沿岸地域の津波被害の状況を視察しました。センターボランティアからは「災害経験を今後の生き方に活かし、深い悲しみから女性の『きずな』を深め共にこれからを強く生き抜くための1つの知恵として、後輩や後世に残そうと努力していることに心うたれた。」「東日本大震災から1年、今となっては元気になって活躍している人達の姿を目にして、未だ解決できないような放射能に苦しんでいる自分達も元気になるなきゃと感じました。」といった感想が寄せられました。

また、やまもと民話の会では証言集「巨大津波」を3集発行していますが、第1集を発行したのは、津波被害からわずか5ヶ月後の2011年8月でした。津波被害を語り継がなくてはいけないという思いだったそうです。(当センター図書室でも閲覧できます。)

今回の現地視察研修で得たものを、今後のセンターでのボランティア活動に積極的に活かしていきたいと思えます。



宿泊室利用のご案内

当センターは研修室のほか、どなたでもご利用いただける宿泊室を低料金で準備しております。出張や観光目的でもご利用いただけますので、皆様のご利用をお待ちしております。なお、男女共同参画目的で宿泊される場合は、通常料金の半額でご利用いただけます。



洋室
(定員2名)



和室
(定員4名)

- ◆シングル利用……お一人様 4,200円 (男女共同参画目的の場合2,100円)
- ◆ツイン以上利用……お一人様 3,800円 (男女共同参画目的の場合1,900円)

- 宿泊室は、洋室19室、和室3室あり、最大50名まで宿泊が可能です。
- 全室にバス・トイレ、TV、冷蔵庫、タオル、歯ブラシ等、ビジネスホテルと同等の設備があるほか、新たにインターネットへの接続も可能となりました。

ふくしま女性支援センター

今年6月、郡山市に「ふくしま女性支援センター」が開所しました。NPO法人 しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島が主催し、女性たちが気軽に立ち寄りおしゃべりしたり、悩みを相談したりできる場所です。8月には、フェルトケーキづくりのワークショップが行われました。広々として明るい空間にテーブルがいくつかあり、参加された方はおしゃべりをしながら楽しそうに針と糸を動かしていました。参加者は20名ほどで、「毎回来ている」といった常連の方も多そうです。ふくしま女性支援センターのスタッフの方にお話を伺いました。

※この事業は、当センター「男女共生を進めるための県民企画応援事業」です。



きっかけ 東日本大震災後、ビッグパレットふくしま避難所内の女性専用スペースの運営に係わり、ワークショップなど行いました。女性専用スペースが閉鎖される時、「こういう場所がなくなるとさみしい」という言葉を聞いて、女性たちが気軽に集まる場所をつくらなきゃ、と思ったのがきっかけです。避難所閉鎖後は郡山市内の集会所で月1回程度、手仕事のワークショップを実施していました。毎回30名を超える参加者があり、集会所では手狭だったこともあり、どこか適当な場所がないかと探すようになりました。

そして、県の地域づくり総合支援事業に応募し採用され、6月に「ふくしま女性支援センター(以下、センター)」として開所することができました。

活動内容 主に、手仕事のワークショップ、おしゃべり茶話会を行っています。ワークショップは、センター内で開催するだけでなく、移動ワークショップも行っています。参加者は、震災後郡山市に避難している方、郡山市民などさまざまです。毎回参加してくれる方も多く、おしゃべりしながら楽しく活動しています。

仮設住宅に住んでいる方のなかには、センターの広々とした空間がうれしいと話される方もいました。ここが少しでも息抜きの場になればうれしいです。

それから、支援していただいた毛糸や着物を材料としてエコたわしや布ぞうり、スカーフなどを作成し、販売もしています。全国各地から、福島の女性たちが作った作品を提供してほしいという依頼があります。作品づくりは、センターだけでなく仮設住宅集会所で行うなど、避難している方々の協力も得ながら行っています。



これから 10月からワークショップを増やすなど、さらに活動を広げていく予定です。ワークショップは、参加している方が「やりたい」というものの中から企画をしています。このセンターがたくさんの人に利用されて、そして、利用者だった女性が運営する側になり、小さなセンターがあちこちにできたらうれしいです。

また、将来は、女性たちが気軽に立ち寄れるカフェのようなお店ができたらいいなと思っています。作ったものを持ち寄り、みんなで運営する、というようなお店をやりたいです。

今後の予定

- ◆ワークショップ
《10:00~12:00/材料費¥500》
10月11日(木)、10月25日(木)
- ◆おしゃべり茶話会
《13:30~15:00/無料》
10月11日(木)、10月25日(木)
- ◆裂き織(さきおり)体験
《午前の部10:00~12:00・午後の部13:30~15:00/無料》
10月4日(木)、10月18日(木)

問い合わせ ふくしま女性支援センター

郡山市安積町荒井字八方丁65-1 山口ビル2階
電話・FAX ● 024-983-8360
メール ● singurumm@yahoo.co.jp
(電話:平日10時~15時 FAX・メール:8時~21時)

未来館 フェスティバル 2012

～ともに歩もう ぶくし指徳真～

平成24年11月23日(祝金)
福島県男女共生センター
「女と男の未来館」
(二本松市霞ヶ城公園近く)

11月23日(金)
シンボルイベント
講演&トークセッション 出演 堂本純子さん・葉谷浩介さん
コーディネーター 千葉悦子館長

11月24日(土)
介護セミナー 10:00～12:00
大盤ふるまい 12:00～13:00
(無料で献汁サービス! ※なくなり次第終了です。)

※その指徳真の皆さんによる自主
企画など楽しいイベントをたくさん
用意してお待ちしています。

mi rai kan

未来館 ニュース

福島県男女共生センター広報誌

2012.10 vol.44

■編集・発行

(財) 福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター (女と男の未来館)

〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1

TEL(0243)23-8301(代) FAX(0243)23-8314

ホームページアドレス <http://www.f-miraikan.or.jp>

メールアドレス mirai@f-miraikan.or.jp

女と男の未来館

検索